



誦 詠
貞徳永代記
二巻目
素明二重印刷
繪師傳忠之四

特別
~5
6056
5上





松永貞徳繪作傳永代記卷之四



京羽三堂二卷目評判

松月菴

隨流ニ縁ヲを付ルや春の水 隨流

判自注ニ云ハけハ右件ノわハほハりキ極ルを
とリりハ引キりテ極ル世ヲ流布ルニ羽三堂小菴ハ
露ハ不消スモ故ハ並ノ評判とシテハ密ク
愚案ノ自評トノハ然ル先隨流ノ二字ハ隨流認
得性無喜亦無憂トモハ心ハ小ハわリり度ありテも
更ハ不計露ハハ吊り境界ニのハいハひクもハ道
流布ルハ流布ルハ世ノ中ニ在リトモ又ハ川ノ秋

卷之四

56-4147

昔々もももく木の葉もく山む流きの水深山
 嵐も吹さらりき難魚の氷つまりも波れ紋神
 もねさ回しりけりし春立系羽つまふ流もれ
 て老木の柳條うと死氷の下れ流もも打物
 波の紋あつりきそ松月れ影をうぬめんも老後
 のねひ出かりや思意の接扱と一句も流るる
 作る面也

柳無氣力條先動

池有波文氷盡開



友鶴山人

子此書の鼻やひくらん又月ぬ 芝峯
判云び向い何れんてをきい法きく田うへ姑およの
嬢とそよりきゆる子の書とい他りことごとらん
己が親父とめたの舅といは接者もかど思ひ
世くあぐられさるる他名のみ書と知も知と
乃介もさるるききり

別風

蝙蝠此日午らぶ筆の林哉

判云び向い何れんてをきい法きく田うへ姑およの
嬢とそよりきゆる子の書とい他りことごとらん
己が親父とめたの舅といは接者もかど思ひ
世くあぐられさるる他名のみ書と知も知と
乃介もさるるききり
祖庭事苑曰吾鼠各狀如小狐以蝙蝠肉翅亦
謂之飛生唯学文とせと徒々昼翁とむろく捨
防主なる一

田中

石井筒也と知と落家一多の 正業

判云こうきく石井樹ハ末代也梧桐の一葉ハ年
物とわづまあおるるといふよやいさう

竹葉翁

秋さるる盛がられおろりむ 風子

判云海より咲行しとあく冬まてうろく久小梅梅
とみゆいぬらん坊の傍の本といふはらん

蘭化堂

陽炎や變鬻牛の丸りりり 常牧

判云はる皆武とよふと。先丸あうら此苗り其風
之常矩ハを付也て風神とば是るがが海むら
事ハせられざりしとありハ野馬陽炎ヤウエンたるが
牛ふたふと一とありはもやありあり牛ふたふと
肉食とる者のいふを中々牛とくくはるも
陽氣とけく丸あうら牛ふたふととあり
左様のちるやう

倭奴

尻形と山出ふとせん山はらう 信徳

判云はるはうとよふと一武士の座をけらぬ
天晴は立。辨務式部も鹿のつゆや二河ハかん
弁をさしやめし海下。肉屋のまほび方句あは
を河さり。いふととあり奉ヒラさおのとて。胡
蝶とさしや秋松ひし。のあどひあてりりせ給也
け人を辨のいふ方もありねう。大らや。老のちおん
多りう。今とよふ。いふととありん。尚元日れ。な
る

遠葉やうの海はらう せ山

たふ

遠葉や頼田御懸燈富士の山

う屋うに。とと春の季とちり。遠葉のあら

小と詩女もよまに月影ひささうらみの一川な
 がら。鶯あゝてふ春はあけぬと云半と作女も
 合點やうぶされ九箇時実法か露句のこゝろ付
 へる古風こそ。若鳥若鳥ふたそ飛りく妹より
 とせしきやうりやあやもは。是も時の風俗はたふ
 かりひねりきとさうま。さうねが。羽二重にのを
 一露句ハ詠人たえり物あれた。若雉とわたり
 わりる。冬あやまう。極當年の元日と云うし

三そとく。先女と髪ためてたう。むじそ人の目。
 けむらあり。も尻とり。げ。ありと云たう。孫ども。
 物ごうへり。げ。と。む。ま。せ。る。一。作。身。元。齊。妙

のては。こ。さ。そ。始。の。女。と。髪。の。め。で。た。う。ん。こ。人
 此目さへべんめきと。らめて。あ。り。是。三十一。た。あ。こ
 露句ハ十九て。は。と。と。云。事。わ。り。是。を。三十一。て。は。ん
 古今。二。双。の。大。さ。の。私。の。お。と。ど。み。わ。り。は。は。き。く
 の。文。法。と。解。と。ら。れ。へ。は。め。で。き。し。く。あ。ま。く

三そとく。先女と髪ためてたう。むじそ人の目。
 へる。あ。り。ん。め。れ。是。あ。て。一。句。と。と。あ。り。き。り

小條

袖てもく目元顔甚れまきく邪 因水

判云はひ句の新樹と利屈ははさうきうり。甚れま
 ことの一句はまうりうり。白河窮年潔松栢冬復音

又いづく実厭不知曆惟以草青為記ふの何ぞそ
まへにげ俳士元日の言ふ事小あ必行肺の如き
みそそて菱笠小おごりといきこり幸け又のりを
菱笠小目そは甚のまゝ氏とせし様よう慈好
もすこし旅立しは八目そるや世とれとがれそそ

菅原

鞠そて後月が軟柳の那 琢石

判云んそそ一うり河り古詩めそうけり坊る但菱
原氏おどハ家の系圖も志う孫ど連方俳奇
と好む地下人々月捨めつと事へ百人一首小菱家
とまやうめて目小立坊る

青本

夕良小坊のこゝ暮のわやと哉 響水

判云んそそ青本の柄小響の宿とけ小討て食
の結小暮のよとく伝るいあせと風持せりたれ
い屏る垣个改座り姆とぐ教りそとく和合坊る

吐雲閣

相撲お小秋そ山鉢をり食れ味 天龍

判云んそ小唯万事と打捨て食る一遍小思ひ入
と海はまぐ世倍小秋のうりこま人小はくといはふ
かゆ七吐雲閣天龍とまうおおあつと神鳴そそ春
とこくそんもま侍ハおとらうとあまそと慈好といり

一休狂言小

天龍うら家一日も吾屋らん
食きくまて吐雲閣

吾崎

三具足鶴あて志りぬる導志 吾遊
判云はむ八人よりむらむと併たやとやとお母へさる
キと尺一きり元日毎日三物の中きると吹出され

鴨永

衣更ん三條の人通り 只丸
判云はむ八三條よりさうぬ事りゆらひさ事と
ゆれさるとちりて往來の人れ衣敷のさくを

二条の本誓寺うらのひわうりて尺一はせあや比
ち寺紙むくことて知恵のちり着板してゆあ
雑踏芝居勢昌とや銘長形も不道れ中あれたく
衣うらぬぬ三條れ且形う那

中川

吉梅あましく味ハまけ毛か 引牛
判云はむ八何のさうちを那 ねあれよある

鶴殿

比敷の鐘よりく落心邪あや心嘆
判云はむ一書あやまらう法敷う二句れは立う
いふかうの邪あぞ不度判

魚風形

風は事ゆきと印つゝ扇式 立吟
判云古めりしをれ九句終は二をりてさきめく
うんうりふ方人此身ふうく入き涼し

童種菴

向書にらそりく虫蟬の声 淳竹
判云一句終なりしをれ九句終は二をりてさきめく
いと涼し但しりく虫や蟬のしきとせ終る露の
めうべしぬりて味ひま

其夕

秋やあひやうとさるる声は艶

判云一句律義之但めりし四字の入るはし

竹山

判云古風くり実法之目元の暮秋と二句み行
くは七言終るはしと系一書は終るはし

服部

定武

判云古句と重業句とさるる時邪にこれ
集るは古句と心邪とさるるは古風にこれ
集るは古句と心邪とさるるは古風にこれ
商人の情とさるるは古風にこれ

羨望してゆつゝ蠟スホシをめぐらす 舟客

判云げ他若一向若さあるへ侍る。水宿江のおや川
うぢうさめを羨の花咲ていと涼しく打たるめを
おろくすやん目がのころり出るも一糸しおりのれく
さのこめくくうぬハ羨の花ゆへこと云んなる下。
かくいひおきふいで感うしくなるに似るれど比白
侍りぎもや世俗まの心すやんの料理。下身の
侍てハうろくくうとや

市村

と物モノの初秋ハツアキ先天下の又表オモより 残石

判云げ他若といふと若く。あつゝありのにを朝

此初秋ハツアキ同他家の手法はとと物秋。又冬初秋ハと物
も同半々。次はうあづら此屋うな屋。詠言ある。
何のお物あると事うわらん。それな。より此捨えん。
是もよ達のの人此手わさ物うておまうらぬ奴てに
も乃は侍めてし。物心の人好むゆりうきと。いま
めうききり。げ侍立を。うらごありはまうりも。うぬ
いど。姉うううううう。う河あきりう順承此何列
也。同若せも下知侍るは一句りるへ。揚聖妃の
縁ありぬ人ハ一向合点ゆくうらうす

佐敷

この時さううあ井とのう様守 反扇

判云けわてりていふめば。七のいめて。あつて。さあ
ては。暑さ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
は。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

八本

頌礼の舞の生とて。同好なり。如水

判云け下の句と。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
六角の扇を。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
短尺なり。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

吟燈子

何そ。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

判云け一句。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
感情。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

梅鶴

と。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

判云け句。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。
あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。あつて。

ろし。障多計のおどし。一毛前毛を引く。つりつ。越別
 わし。さし。つ。西入。初ん。も。く。あ。ひ。く。物。あ。れ。が。く。と。世
 有。鴻。の。き。し。一。紙。足。あ。ひ。ひ。く。切。字。な。し。一。又。き。之。紙。切。
 大。ま。り。一。ち。き。し。て。唯。一。而。の。平。勿。と。一。裏。勝。二。裏。勝。と。え。
 一。と。く。一。を。や。め。を。あ。し。て。初。心。紙。あ。が。う。う。と。あ。と。若。多。
 切。ま。ん。び。乃。と。法。法。と。し。一。ら。う。事。一。東。兵。若。れ。大。社。
 志。ね。系。人。の。さ。う。て。あ。さ。り。幾。事。半。た。あ。と。り。な。り。
 辨。士。に。本。の。葉。を。物。れ。入。ら。り。て。物。の。と。あ。ひ。ひ。く。ら。
 初。方。此。道。を。う。ら。ひ。を。延。し。君。代。の。と。く。と。あ。ひ。ひ。く。
 一。り。て。越。る。南。校。は。葉。と。う。け。胡。馬。也。風。也。い。ら。ひ。び。ね。も。
 そ。む。く。は。い。く。く。國。土。と。安。徳。な。り。ん。や。也。と。う。べ。し。く。

梅文

と。あ。く。と。花。の。花。う。び。杜。の。あ。

判。を。び。み。り。一。用。に。不。立。首。之。れ。連。は。冠。不。立。と。云。は。
 似。り。越。別。香。匂。の。と。う。く。一。冠。装。束。皆。と。く。を。て。
 徳。根。具。足。の。妙。神。と。云。は。は。ら。を。不。調。法。が。う。紅。し。
 冠。不。立。袴。不。立。皆。不。帯。の。各。自。出。り。越。ハ。皆。冠。
 此。具。足。と。う。紙。連。あ。て。受。首。尾。と。云。詩。文。少。て。是。物。
 合。越。緒。ゆ。て。受。礼。同。と。云。ひ。露。匂。と。あ。く。と。の。冠。
 杜。の。あ。れ。皆。に。う。ら。ひ。と。あ。き。そ。別。の。物。へ。首。う。ら。ひ。と。う。
 不。帯。た。く。ん。は。す。あ。く。厚。く。う。ん。と。云。と。信。て。も。杜。
 あ。へ。り。の。も。ひ。く。は。も。あ。れ。を。首。と。れ。と。云。あ。新。

れくわ者なり。極ば句と一字もくつと。要とひ神り
 ちして。終根鼻是の妙神とわらうと。

花の花よるくとうじ杜若 班江梅結

是より自然の秘密切きりり。上界の露句を花
 の花うじの迷向。奇妙に用露句は度。鴻與流。琢
 磨是非。以石打鉄。生於中光。是石德乎鉄能乎。
 以邪生正。以非生是。是非父母相交而生。道鴻以
 京羽二重。流生貞德永代記。是生鴻乎。生流乎。以
 堀江泥中。杜若生京極玉泉之杜若。兩句無切字
 杜若自然生雲泥一如。地夫泰和滑替乱同。誹諧



首尾之妙花。天然顯是。無思邪者哉。あはれ此水の
地江より。比紫の深羽二重。透額に冠と名し。さき
うひくさ。良も花。平け言ひ。子に后量。御産平
安滅跡重く。

系羽二重發句辨別

連弄引離乃付合

前句

紫に海よりこれ系御海水

宗祇

附句

くさけくさ候八くこれ里宗長

京羽二重發書卷頭

誦讀の系羽二重の七夕書此手際あそわくは生面
の神に織はるくあくも形一。地江林邊の縁仕
立くゆああしてけ道の緒長く情をこたら我
あきみんるに勅思女。在機中。ひひと林邊子
も水あひあさるく。先哲をまゝ。あきみん感して
今や系此系あは潤あん八月廿日

蘭化堂常牧書

形とのふれをんかまゝに辨ふ詩と織子わら糸の
たのこの羽二重に誂造と織りて世しく此寶と
かんそれのあき誰れ辨

信徳

請跋諾

林鴻所撰俳諧京羽二重一韻四冊

讚曰

虛談誤在王夷甫

團水書

跋書卷軸

珠留の若蘭う綿の詩ハミ川うみ尺ハ漢さる
八百余の文字紙織て連波うみのあま流つり
うや粵林結といふ若あり山の経あり緯あり
とを海虫の夕く糸羽二重工なるあまら叶
まじりのあま流まら思ふの山とけあるも
たゆまゆらうにあまらうや流まふとあまら言
厚の流えさる秋の風

昔元禄四年辛未秋陶八月下浣

蘆月菴似船書之

右京羽二重十有三跋都_テ不及_レ評判_ニ
只_レ誹_レ韻各_レ違_レ舉_テ自_レ毫_レ讚_レ列_レ證_レ言_ヲ以_テ余
並_レ之_レ軸_レ跋_一嘆_ハ積_テ鴻_レ鷹_レ羽_二重_一部
始_レ終_レ櫃_レ荷_レ任_テ雲_レ風_レ渡_レ阿_レ蘭_レ海_ヲ是_レ蘆_レ月
乎_レ朱_レ丸_レ之_レ簇_レ似_レ紅_レ毛_レ船_ニ乎

松月菴一源子

隨流述之

貞德永代記跋

一源子_カ曰_ク此_ノ永代_ノ記_ハ貞德_ノ之_レ遺_キ
書_ニ而_レ初_レ誹_レ入_レ德_ニ之_レ門_也於_レ今_ニ可_キ
見_ニ正_レ誹_ノ爲_レ學_ニ次_レ第_一者_ハ獨_リ賴_リ此_ノ書_ヲ
之_レ存_ニ而_レ諸_レ誹_レ書_ニ次_レ之_レ誹_レ者_ハ必_ス由_テ
是_ニ而_レ學_ニ焉_ヲ則_チ庶_カ乎_ニ其_ノ不_レ差_カ矣

洛山

道人書之

元禄五_壬申歲三月吉日

三條繩手大黒町

橘屋庄三郎板行

